

東アジアの平和と多元的な宗教・ NGO・市民社会の役割

山 本 俊 正

本プロジェクトは2013年度から開始され、2年目を迎え、これまでの平和研究及びエキュメニカルな視点を活かしつつ、研究員の関心領域に基づく研究発表に合わせて、研究活動を進めた。昨年、開催されたRCC主催の公開講演会、「東アジアの和解とレイシズムヘイトスピーチを支える日本社会を問う」（講演者：辛 淑玉、2013年11月25日）を受け、本プロジェクトでは以下のように研究会を開催した。

■第1回研究会

日時:2014年6月4日（水）

場所:吉岡記念館会議室

テーマ:「現代の若者の生きづらさと東アジアにおける和解と共生のミッションを考える」発表者:梁 陽日（RCC研究員、立命館大学生存学研究センター、マイノリティー研究プロジェクト、プロジェクトマネジャー）

参加者:15名

発表では、現在の若者を中心に「反中・嫌韓」などと表現される意識が、マスコミの情報操作によって醸成されていること。また、その結果として在日コリアンなど少数者に対するヘイトスピーチが路上、またはネット上で渦巻いている現状が指摘された。しかし、それと同時に、多くの若者は格差と自らが排除されている現実の中に身をおいていることから、社会の中で、生きづらさを強いられていることが指摘された。梁氏は最初に、現在の若者が直面している

諸問題を、以下の七点を中心に、統計資料や米国国家情報会議の報告なども紹介しながら解説された。①弱肉強食が当たり前の時代②経済格差を背景に「意欲（やる気）の格差」が広がる時代③少子化による高校、専門学校、大学への全入時代④ひきこもり（70万人）予備軍（155万人）を抱える時代⑤高等教育からの中退者の増加が雇用問題に直結する時代⑥発達障害、精神疾患が「無力な弱者」とされる時代⑦生きづらさの罫としてのアディクション（パソコン、ゲーム、携帯、アニメ、ポルノ）の時代。これらの若者を巡る複雑な状況は深刻であり、問題解決のために若者への教育活動、社会的支援活動を充実させることが重要であることを、具体的な事例と自身の経験を含めて、強調された。続いて、梁氏は対人援助の専門家の立場から、「ミッションとしての和解と共生に向けて」、以下四点を中心に今後の働きについて提言をされた。①学生・若者へのエンパワメント支援へのアクション②韓国・中国における若者の生きづらさへの理解③和解と共生への希望—和解のプロセスの可能性④関西学院やRCCによる若者支援のネットワーク形成の可能性。特に第四点に関連して、問題解決には、領域横断的なネットワーク形成やソーシャルキャピタル（社会関係資本）づくりが必要であり、関西学院としても、若者を支援する組織文化を形成、充実させることが重要であることが指摘された。

■第2回研究会（東アジア学生交流カフェ）

日時:11月20日（木）

場所:関学会館

テーマ:「関学で日本人学生と留学生のコラボは進んでいるのか?もっとコラボするにはどうしたらよいか?何が必要か?」

ファシリテーター:森本郁代（本学法学部教授）榎本てる子（RCC主任研究員）

参加者:40名（日本人学生20名、留学生15名、教職員5名）

研究会（交流カフェ）では、上記のテーマに従い、4つの小グループに分かれ、お茶を飲みながら、アイスブレーキング、KJ法によるグループ討議と発表、全体での分かち合いがなされた。参加者からは、「関学の留学生と交流する機会や

場が初めてだったので、知らないことがわかってよかった」(神学部学生)、「私のテーブルには私を含めて日本人が3名、韓国人が3名いた。韓国の文化や情勢について多くを教えていただいた」(経済学部学生)「学部の留学生がその国の言葉を教えるアルバイトが学内でできると良いと思った」(中国人留学生)「日本人の側からしたら留学生とのコラボが進んでいると思っていたが、留学生の側から見ると、進んでいない現実がわかった」(神学部学生)などの感想が寄せられた。

■第3回研究会(和解と共生のワークショップ)

日時:12月12日(金)

場所:関学会館

テーマ:「和解と共生のワークショップーちがいを豊かさに、共に生きる世界の居場所としての関学をめざして」

ファシリテーター:梁陽日(立命館大学生存学研究センター/RCC研究員)

参加者:8名

研究会(ワークショップ)では、日本・アジアをはじめ世界の中の私たちの置かれて状況を考えることから出発した。「神の似姿」として創造された人間が本当にその尊厳を大切にされているのか。また、私たちは政治、経済、歴史の中で、格差や差別、排除の中に置かれているのではないか。「ジャンケン・オリンピック」のゲームを通して、「勝ち組」、「負け組」による、抑圧的構造を疑似体験した。また、東アジアで最も必要とされている相互の信頼関係の醸成を「トラスト・フォール」(ペアになり、一人が後ろに倒れ、もう一人がそれを支える)の体験によって、身体性をもって知ることができた。また、自分を大切にすることと、他者への依存の問題、「いじめ」に関する経験など、意見交換が行われた。